

第 103 回 歴史リレー講座「古代の^{とぶひ}烽」 相原 嘉之氏 (R5.4.16)

古代、^{のろし}烽火は「とぶひ」と呼ばれ、情報伝達の一つとして活用されていました。ここ王寺町で昨年 11 月から今年 2 月にかけて「みんなでつくる明神山烽火 MAP プロジェクト」を実施しましたので、ご存じの方も多と思います。実際に煙を上げてみることで多くの成果と課題を得ることができました。

さて、遣隋使が始まった推古天皇の時代から藤原京に都を遷した持統天皇の時代までソフト、ハード両面での国づくりが進みました。その中で特筆すべき事件が、百濟復興軍の要請を受けて齊明天皇も九州まで出征したことで知られる白村江の戦い(663 年)でしょう。残念ながら日本は唐・新羅軍に敗れ、その後、唐の侵攻を危惧した中大兄皇子は、国防強化を図るとともに、対馬、壱岐、筑紫に防人と山城の整備に着手。さらに、飛鳥からより安全な近江大津宮に都を遷すという念の入れようでした。

そして、これらの国防体制の強化に欠かせなかった情報伝達方法が烽です。その目的は情報をいかに正確かつ迅速に都に伝えるかということに尽きます。九州から烽火で一筆書きのように伝達リレーすることで都に情報を送れるようにしていました。したがって、難波宮から高安山を経て飛鳥・藤原宮への伝達ルートも、平城遷都後は生駒山を経て平城宮へと変更されています。

「とぶひ」の表記は時代によってさまざまです。『日本書紀』では烽(とぶひ・すすみ)、『太平記』では狼煙(ろうえん)、『祇園執行日記』では狼煙(のろし)といった具合です。奈良時代の『養老軍防令』には、烽全般の細かな規定が記されています。まず、間隔は 40 里(約 21km)で 24 時間体制であること。まさに高安山から飛鳥までが約 20km です。また、昼は煙を、夜は火を放つこと。リレー形式なので、次烽の反応が見られない、あるいは通信不能の場合は人力で伝達すること。放つ烽の数も決まっており、外国からの使節団であれば^{きよ}1炬、敵なら 2 炬、それが大軍ならば 3 炬。ほかに、烽長や烽子の任務と選任方法、烽の構造、火炬(松明)の作り方など、その内容は細部に及びます。

奈良県には今のところ、ふたつの烽火関連遺跡が確認されています。高取町の佐田タカヤマ遺跡(標高 152.5m)と森カシ谷遺跡(標高 127m)です。どちらも小山の頂部にすり鉢状の大土坑が見られ、北東から南にかけての眺望が開ける場所です。これらの遺跡は監視施設も兼ね備えていたのでしょうか。なお、烽は地名にも登場し、飛鳥周辺や葛城山東麓には小字「ヒフリ」の地名が 20 ほど残っており、烽と推定されています。ほかに「火振山」「フグリ山」「火振塚」「張山」などバリエーション豊かです。これらはいわゆる中継地点であり、「飛鳥烽群ネットワーク」を構築していたと考えられます。

最後に、明神山(273.6m)から明日香村甘樫丘までの約 16km を繋いだ実証実験(計 3 回)の結果についてお話しします。明神山は低山ながらも 360 度のパノラマがひらける実験好適地です。製作したのろし台はドラム缶ロケットストーブ型(高さ約 2m)で、燻ぶらせた木材は杉と檜の青葉です。着火から甘樫丘が確認するまでの時間が約 6 分という結果から、理論上(ロスの無い場合)は博多から飛鳥までの直線距離 500km を最速半日程度あれば ぞ伝達可能であることが導き出されました。しかし、視認が可能であっても実際は天候や風量によってかなり左右されること、背景が空だと白い煙は認識しづらいことなどから、20km という間隔はやはり厳しく、実際はもう少し短い間隔だったと考えられます。明神山頂上は風の影響を受けやすく、煙を認知しにくいという難点にも直面しました。また、烽火が届いた合図として明日香村甘樫丘から上げられたバルーン(直径 2.5m)が景観に紛れて見えなかったことは非常に残念でした。しかしながら、今回の実験結果を通してさまざまな改善点が見えてきました。例えば、場所を山頂から少し下に移動する、ドラム缶の出口の直径を狭くする、燃焼材の種類や量を変える、送り込む風量を調節してみるなどです。本プロジェクトによる実験は今後も試行錯誤を重ねながら継続していくつもりです。